

# 公立中学校におけるワークショップ型校内研修を核にした授業力向上の取組<sup>†</sup> —学校改善プランに即した一年間の実践を通して—

浦野 弘\*

秋田大学教育文化学部

本研究では、教師相互の協同によるワークショップ型研修方式を取り入れ、生徒の学力向上を目指した校内研修会の在り方を4年間にわたり改善してきた潟上市立天王中学校を対象に、2010年度の実践をもとに、教師の授業力向上のための研修と生徒の学力向上の成果について報告している。

授業を対象にし、授業力向上を目指す校内研修会そのものと、それを支える教員間の共通理解を得るための職員会議等を含めた「校内研修」の体制が効果的に機能したことを示している。また、天中方式という付箋紙を用いたワークショップ型研修会が効果的であることをアンケート調査から明らかにし、さらには外部講師との連携による研修会の効果が大きいことを示している。

**キーワード：**専門職としての力量、教師の成長、現職教育、校内授業研修会、学力向上

## 1. はじめに

児童生徒の学習状況の改善と学力の向上は、学校教育現場では喫緊の課題となっている。その解決には、教師の授業力の向上が不可欠である。

この点については、明治以来の授業研究を基礎とした校内研修というシステムが我が国にはあり、日本の学校文化として自立的に維持されてきた。このシステムは、国際的にも"Lesson Study", "Jugyou Kentyuu"として広く認知されるようになってきた。

一方、このような校内研修は、特に中学校における研修は脆弱であり、一握りの教師の授業公開と授業反省会が行われているのみで、研修が形骸化し同僚性が生まれにくい状況にあるという指摘がある(例えば、佐藤・佐藤, 2003)。

このような背景を受け、例えば、村川(2004, 2006, 2010)は、教師に「確かな学力」と「生きる力」を育むための授業開発力とカリキュラム開発力が求め

られるとし、「教師力」を高めていく方法としてワークショップ型研修の手法を提案している。また、澤本(2009)は、教師成長の鍵となる「実践知」形成の基礎である熟考と対話と協同を目指す授業研究の基本的な視点として、熟考と省察を通じて形成する実践知モデルを基盤とした、教師成長を目指す「授業リフレクション研究」の手法を提案している。筆者も、校内研修会の在り方を自律的に検討している事例を報告してしてきた(浦野, 2009)。

本研究では、教師相互の協同によるワークショップ型研修方式を取り入れ、生徒の学力向上を目指した校内研修会の在り方を4年間にわたり改善してきた潟上市立天王中学校を対象に、2010年度の実践をもとに、教師の授業力向上のための研修と生徒の学力向上の成果について検討する。

## 2. 研究の目的

2007年4月に赴任した現任校長が同校の実態に即して同年11月に「生活がよくなれば学力も向上する」という前提のもとに、学校改革を提案した。筆者はその当時から現在まで、継続して同校の訪問を続け、その変容を観察してきた。2年目の実践の一部は、

2011年2月15日受理

<sup>†</sup>An Approach for Improvement of Teacher's Competency of Lesson Management by the Workshop Type In-service Training in Public Junior High School

\*Hiroshi URANO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

浦野（2009）で報告した。

本研究では、このような授業を対象にし、授業力向上を目指す校内研修会そのものと、それを支える教員間の共通理解を得るための職員会議等を含めた「校内研修」の体制について報告する。また、これらの改善を通して、生徒の学力向上や生活改善をもたらしたことについても示す。

### 3. 2007年度からの実践の状況

#### 3-1. 実践校の課題と改善プラン

同校は2007年11月に、生徒の生活の改善と学力向上を目指し、校長のリーダーシップのもと、次の7つの基本方針を打ち出し、改善に取り組み出した。

##### ①生活＝学習の一体的推進

基本的な生活と学習態度の見直しを一体的に推進し、学習に向かう構えをつくる。

##### ②全校体制による推進

学年、教科、部活の枠を超えて、全校一丸となって推進する。

##### ③生徒活動の重視

生徒の自主的な活動を活性化し、生活向上と学習重視の流れをつくる。

##### ④授業力の向上

話をよく聞き、生徒同士が学び合う授業をめざし、研修体制の充実を図る。

##### ⑤家庭学習の習慣化

家庭学習の習慣化を促し、達成感を味わいながら取り組める工夫をする。

##### ⑥条件整備

方針実現のため、日課変更や分掌業務の見直しを行い、保護者等にも周知する。

##### ⑦評価・検証。

達成目標（時間、得点、評価段階等）を明示し、評価・検証を経て精度を高める。

この基本方針に基づき、例えば、学習規律の維持・向上を目指した日常的な取組では、チャイム席、挨拶、集中、忘れ物、の4項目について授業終了後に5段階の評価を受け、時間割にそって一週間分が記入できるような「生活・学習評価表」を開発した。それを学級委員が帰りの会で発表し、授業態度等の振り返りを行う。また生徒会では毎月第2週を「生活・学習強調週間」と位置づけ、「めざせ集中4.5以上」というようなキャンペーン活動を実施し、全校の評価を一覧表で公開し、優秀クラスを表彰する等

の意欲付けを図った。

#### 3-2. 教師の授業力向上の取組－わかる授業へ

日々の授業においては、お互いが認めかかわり合う雰囲気の中で、「わかる授業」に努め、「学びからの逃走」に歯止めをかけたいという願いから、協同的な学習の形態を全校で実施することにし、すでに近隣の中学校で行われていた「学びの共同体」の実践にも学びながら、コの字型の机配置、4人グループによる「学び合い」を学年進行で緩やかな導入を2007年から図った。これは、生徒の学びを丁寧に見察し、授業研究会で交流し合うことなども含め、多くの教師にとっては新しい体験であり、戸惑いつつ、試行錯誤をしてきた。その当時の校内研修会の受け止め方は浦野（2009）によって報告した。

また、2010年度においても、「一人一研究授業」、「年2回の相互授業参観」、「教科を超えた学年部授業研究会」等を、年間を通し計画的に実施している。さらに、近くにある県総合教育センターの指導主事等を活用した授業研究会を試み、事後研究会の活性化を図ってきた。2009年度までは使い分けていた付箋紙を用いたワークショップ型の研修会方式を、生徒個々の学びの姿も語ることを目指した「学び・付箋方式＝天中スタイル」として全ての授業検討会で実施してきている。

#### 3-3. 家庭学習の習慣化への努力

2007年当時、「学びからの逃走」が最も顕著に現れていたのが家庭学習量の少なさであった。そこで「学びシフト」と称し、家庭学習の時間的な増加に努めた。この取組は学年部を中心に行われ、家庭学習ノートの提出、家庭学習時間倍増キャンペーンの実施、週末課題の提出等の外発的ではあるが、生徒の意識高揚の手だてが試みられた。その結果、家庭での「学びからの逃走」に歯止めがかかり、家庭でも机に向かう習慣が高まってきた（表1参照）。

なお、この成果を受けて、2010年度には、「家庭

表1 平日1時間以上の家庭学習をする生徒の割合(%)

調査年	1年	2年	3年	( ) : 県平均
2007年	34 (57)	26 (49)	49 (59)	
2009年	86 (64)	82 (55)	72 (70)	

[注]・2007年度は1, 2, 3年（全県調査4月）

・2009年度は3年（全国調査4月）1, 2年（全県調査12月）

学習の質的向上」を目指し、5教科の「家庭学習の手引」を作成し、指導に取り組んでいる。

#### 4. 2010年度の校内研修会への取組状況と、その特徴

校内研修会のみならず、日常的な授業づくりを共通に行うことを目指し、2010年度当初に策定した申し合わせ等を示す。

##### 4-1. 年度当初の申し合わせ事項からの発展

日常的に実践する授業づくりにおいて取り組む事項を表2のように全校を挙げて共通理解し、足並みを揃えて実践するように心がけている。同様に校内

研修の重点事項についても表3のように行っている。

表2にある「『学び合い』のある授業づくりの深化」は、2010年度のはじめの職員会議において、

- ・コの字型座席を日常の基本形とし、その中に入り、顔を合わせた対話を促す授業を実践する。
- ・黒板に背を向けられないような配置の4人グループを静かに速くできるようにする。
- ・隣同士のコミュニケーションを活性化させる学習活動を取り入れ、互いに確かめ合うことや分からないことを聞く等を促す。

等の授業スタイルの共通理解を図っている。さらに、次の職員会議では「4人グループによる学び合いに慣

表2 2010年度当初に策定した研究の重点化①「『学び合い』のある授業づくりの深化」の取組内容

具体的実践事項	取組内容
1. コの字型座席による一斉指導と手立てを明確にしたグループ活動 (他者とのコミュニケーションのある協同的な学びの推進)	①個別の学習活動でも分からないことをすぐに聞ける、教えられる(安心感のある学び) 関係づくり ②1時間に1回、4人グループによる学習活動の設定と有効活用のための手立ての明確化 ③コの字型座席によるコミュニケーションする力(共有する・発言をつなぐ)の向上
2. 学習意欲や課題意識を高め、全員の学びを保障する学習課題の設定 ○学習課題「…か」「なぜだろう」(問い) ○学習課題「…しよう」(活動のめあて)	①学習意欲の喚起や基礎・基本の定着、思考の深化など、手立てを明確にしたグループ活動とそれを促す発問・指示 ②理解の程度が様々な状況にある生徒が学び合うこと(互恵的な学び)を通して、レベルアップする学習課題
3. 学習を適切にまとめる時間の確保 (成果と課題の明確化と共有) ○学習課題「…か」「なぜだろう」(問い)に対する学習のまとめはその「答え」 ○学習課題「…しよう」(活動のめあて)に対する学習のまとめはその「成果と課題」「活動を通して得た気づき」	①生徒個々が「分かった・できた」ことを共有する(コの字型座席の活用)時間の確保 ②グループ活動でできたことを一人でもできることを確認する(インプットされたことが適切にアウトプットされたかどうかを見取る作業)時間の確保 ③学習課題とまとめの連動(授業の終末の生徒の姿を明確にした学習課題の設定)

表3 2010年度当初に策定した研究の重点化②「授業力向上を目指した校内研修の充実」の取組内容

具体的実践事項	取組内容
1. 一人一研究授業の実践	①教科等訪問、算数・数学学力向上推進班要請訪問(1回)、学びの研究会(5・12月)、講師研修会、研修学年部会 ②天王中方式(授業・付箋研修(生徒))の実践の深化 ・本時案を作成し、研究授業を実施(授業を見る視点) ・付箋紙を用いた授業分析(マトリクス法+付箋に生徒の学びの姿+指導主事等の教科の専門的指導者による指導助言)
2. 相互授業参観(年2回の「学び合い期間」の設定)	①1回目6~7月、2回目11月に設定 ②「学び合い」の場面(前・中・後)と手立てを明示 ③学習指導部(学年別)で参観計画を立案
3. 月例研修会の計画的実施	①全体研修会と研修学年部会・教科部会 ②「学び合い」実践発表や各研修会・研究会報告会、学習状況調査の分析、外部講師を招いての講話などの計画的実施
4. 生徒の授業評価を活用した授業改善	①授業について教師・生徒相互が評価し合い、結果を授業改善に反映(7・12月) ②諸調査(県学習状況・生徒評価)と関連付けた生徒個々に対するケア

れさせる」ための方策として、次のような具体的な事例を上げ、一層の共通理解を得る努力を行っている。

- ・学習課題を確実に掲示（板書）し、本時のゴールを明確に示す（具体的な板書等の例示）。
- ・1時間に一度は、グループによる学び合いを設定する。
- ・グループによる学び合いでの手立てを、はっきり示す（初めは一人で考える→分からないことを聞く、前時の学習内容を確認する→一通りできたらグループ内で確認する、など）。
- ・グループによる学び合いでは、「より分かる・できるようになる」「新しい見方・考え方を交流し共有する」という目的を生徒に伝える。
- ・グループで考えを一つにまとめるのではなく、

最後は自分の考えとして発言させる。

- ・グループ活動が低調であったり、活動から外れる生徒がいたりする場合は、意図的にかかわったり、活動を中止し、コの字型に戻したりするようにする（グループに依存しない）。

このように教師集団も段階的に成長するように心がけ、さらに、取組がかけ声だけに終わっていないかを毎月、チェックも行っている。さらに、このような視点を持ち、後述する校内授業研修会を参観することになる。

#### 4-2. 校内授業研修会

同校での2010年度に実施した校内授業研修会の日程を表4に示す。「一人一研究授業を提示する」と

表4 天王中学校の平成22年度の授業を対象とした校内研修会一覧

月	日	曜	研修内容<形態>	授業者等	指導者	担当	
5	18	水	学びの研究会①<全体・付箋>	2年保体	外部講師	研究主任 学習指導部	
	24	月	中央地区講師（臨時）研修会 中央教育事務所長訪問（一般授業3校時）	1年数学 2年道徳 3年理科	中教事務所指導主事	教務主任 研究主任	
6	14	月	研修学年部会<付箋>	3年技家	県総教七指導主事	学習指導部	
	15	火	算数・数学学力向上推進班計画訪問 <付箋>	2年数学	中教事務所指導主事	教務主任 教科主任 研究主任	
	16	水	B小学校校内研修	4年算数			
	28	月	研修学年部会<付箋>	2年国語	県総教七指導主事	研究主任 学習指導部	
	28日(月)～7月8日(木)			相互授業参観期間①			
7	1	木	中央教育事務所指導主事教科等訪問 (一般授業2校時) <分科会・付箋>	2年理科 1年音楽 3年英語 3年道徳	中教事務所指導主事 等計4名	教科主任 研究主任	
	5	月	研修学年部会<付箋>	3年国語		研究主任 学習指導部	
10	4	月	研修学年部会<付箋>	1年理科 2年美術	県総教七指導主 事等2名	研究主任 学習指導部	
11	8	月	研修学年部会<付箋>	1年社会 3年数学	県総教七指導主事2 名	研究主任 学習指導部	
	8日(月)～12月1日(水)			相互授業参観期間②			
	29	月	研修学年部会<付箋>	1年国語 3年社会	県総教七指導主 事2名	研究主任 学習指導部	
12	1	水	学びの研究会②<全体・付箋>	2年英語	外部講師	研究主任 学習指導部	
	6	月	研修学年部会<付箋>	1年保体 3年保体	県総教七指導主事	研究主任 学習指導部	

いう原則のもとに、実践している。また、その検討会の持ち方は、付箋紙を用いたワークショップ型の研修会を「天中方式・付箋研修」と称して、実践している。その特徴は、年度当初に共通理解をはかる配付物（資料1参照）に基づき、年10回の授業検討会を全てこの方式で実施している。付箋紙は初めから全てを貼るのではなく、貼りながら書いた内容を補足・解説する発言をすることになっている。この点が付箋紙に記入する際の授業観や教育観、あるいは実践知の片鱗を垣間見ることになり、語りにつながっている。同校の授業検討の場面では、このようなことが非常にスムーズに進行している。

表5は、浦野（2009）が指摘した研修会のねらいとその方法に相性があり、ワークショップ型は多様なねらいに活用できることを示したものである。そこで、同校は、2010年度には全ての研修会にこの方式を活用することにした。

表5 研修のねらい・ターゲットと研修会の方法

ターゲット	教師		子ども
	教科の内容 教科に依存 する方法	授業の展開 授業技術	子どもの学び 協同学習
従来型	◎	○	
ワーク ショップ型	○	◎	○
子どもの学 び型		○	◎

授業を対象にした校内研修会の運営方針は、

- ・生徒の学びの事実から授業を語る
- ・学年部単位での研修も行う
- ・教科の壁を超える

という特徴を有している。

その際、県教育委員会と市教育委員会との連携事業を活用して、近くにある秋田県総合教育センターの指導主事に指導の要請も行っている。その際は、付箋紙を用いた研修が完了した後に、指導助言をもらうことが多い。

さらに、校内研修会の他に、「相互授業参観」を年に2回、各期間は2～3週間程度をとり、各自が単元名とその時間のグループ活動のおよその時間帯（1時間の中の前半か中頃か後半かという程度）を提示し、参観者はグループ活動の時間帯だけでもいいので参観するというものを設けている。

## 5. 校内研修会に関する先生方の評価

以下に、同校の全教員を対象に、研修会の在り方について、①学年部単位で授業検討会、②天中方式の研修方法、③学びの研究会のそれぞれについて、自由記述によるアンケート調査を2010年12月～1月にかけて実施した。その回答を集約したものをもとに、以下で検討する。

### 5-1. 学年部単位での授業検討会について

2007年の改革以来、実施してきた学年部という単位で行う授業検討会の方式についての回答を集約したものを表6に示す。全般的には、この方式に対する評価は高いことがわかる。一方、2010年4月の異動により、このような方式が初めてという教員に戸惑い、とりわけ、他クラスが自習となる点や授業意図、観察の視点等の事前研の必要性等の指摘がある。

### 5-2. 「天中方式・付箋研修」の研修方法について

同校においては、「天中方式・付箋研修」と称して、生徒の学びの事実を根拠にして（付箋紙にできるだけ記録して）、付箋紙を用いたワークショップ型の研修は定着してきている。この研修方法に関しての回答結果を表7に示す。様々の意見や感想などが出しやすい雰囲気や教科の枠組みにとらわれずに話し合いが成立すること、その結果、学校全体の研修が同じ手法で進められるというような効果があげられている。一方で、転任者等を含めてこの手法や方式によるメリットの理解が不十分のまま実践されていたと思われる記述もあり、一層の共通理解のもとに実践することの重要性がわかる。

### 5-3. 学びの研究会について

同校では、前述のように、年に2回外部講師を招いて「学びの研究会」を開催している。その際には、校内研修会を公開し、他校からの参観者もある（通常の指導主事訪問等の校内研修会には近隣の連携を図っている小学校からの参観者がある）。この研究会の方式に関しての回答結果を表8に示す。

観察対象を焦点化することによる効果の指摘があり、この点はこの学びの研究会のみならず、全ての授業研究会に当てはまることである。

2010年度のこの研究会は、従来の学びの共同体的な検討会の様式に囚われずに、天中方式・付箋研修によるワークショップ型研修の方法で行っている。

表6 学年部単位の授業検討会に関する成果と課題

成	<p style="text-align: right;">学年部生徒の学びの姿・生徒理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○生徒一人一人の反応をよく見る事ができた。</li> <li>○参観する側としては、自分の教科以外での生徒の様子を見る事ができ、多面的生徒理解に役立った。</li> <li>○学年の生徒の理解も図られる。</li> <li>○他教科での生徒の授業に向かう姿勢や違う表情を知ることができた。</li> <li>○自分の教科以外での生徒の授業態度や様子が見られ、生徒理解につながった。</li> <li>○担当教科以外での生徒の様子を見る事ができ、中には意外な面を発見することができた生徒もあった。</li> <li>○なかなか他教科の授業を参観する機会となり、参考となる点が多かった。生徒たちのいろいろな面を見ることもでき、有効であった。</li> <li>○他の授業参観によって、生徒のいろいろな姿を見る事ができた。また、焦点生徒について話し合うことができた。</li> <li>○普段関わっている生徒が他の教科ではどのように学んでいるかを知ることができる。</li> <li>○普段関わっている生徒が他教科の授業ではどのように学習を進めているかを見る事ができ、今後の参考となった。</li> <li>○他教科での生徒の学びが分かる。</li> </ul>
果	<p style="text-align: right;">教科の枠を超えた研修</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○他教科の授業の進め方や工夫が分かり、参考になった。</li> <li>○授業する側としては、他教科の先生にも分かりやすく、生徒の実態を生かして、という意識でより丁寧に授業の準備をすることができた。</li> <li>○他教科の先生方の意見を聞くことができ、視野が広がる。</li> <li>○自分の教科での生徒の様子、授業づくりの方向性だけでなく、広い視野で見つめ直すことができた。</li> <li>○他教科の先生の異なる視点からのアドバイスは自分の授業を見つめ直すきっかけになった。</li> <li>○教科の枠を超えて、話し合うことができた。</li> <li>○自分の教科とは違う教科の授業を参観することができて勉強になった。</li> </ul>
	<p style="text-align: right;">同学年部研修の長所・同僚性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○学年の生徒の様子がよく分かる先生方で話し合いをすることが多いので、より突っ込んだ話し合いになり、その結果をすぐ学年の指導に生かすことができた。</li> <li>○教科の枠でなく、同一の生徒を指導している仲間という枠で研修を行うことが一番大切なことだと思う。</li> <li>○学年の生徒、学年の先生方での研修なので、気心も知れて、意見の交換が活発にできる。</li> <li>○お互いに授業を見合えて、たいへん参考になった。</li> </ul>
	<p style="text-align: right;">一人一研究授業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○とにかく全員が一度は研修（研究授業）を行うことは必要の第一。成果がないはずがない。</li> <li>○一人一授業で研修の機会が与えられていてありがたい。他学年、他教科の授業を参観でき、大変よい機会だった。</li> <li>○基本的な学習習慣について協議、確認し合える。</li> <li>○講師を招いて、専門性について考えられた。</li> </ul>
課	<p style="text-align: right;">自習への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●生徒の自習時間をどうするか（先生不在時の心配と自習時間の多さ）。</li> <li>●自分の教科の授業を自習にしてまで参加しないとならない。授業時数の少ない教科にとっては痛手である。</li> <li>●自分の授業に支障が出る。</li> <li>●生徒が自習になってしまうのが惜しい。</li> <li>●授業を参観するために、自分の授業を自習にしなければならない点について、改善策はないか。</li> <li>●学年部が必ず学年の授業にかかわっている時間に研修できるわけではないので、他学年への補充等が必要になるだろうと気になる。</li> <li>●自分の授業が自習になるので、時間割の工夫が必要である。</li> <li>●時期の分散化が必要なため、先生によっては多忙を極めることが課題。</li> <li>●余裕をもった取組。</li> </ul>
題	<p style="text-align: right;">付箋研修のルールの共通理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●付箋研修で教科の特性や授業の進め方に深く入り過ぎ、生徒の様子を話し合えないことがあった。</li> <li>●話し合いで一つの話から発展していくのはよいが話からそれていく場合があったので注意したい。</li> </ul> <p style="text-align: right;">事前検討会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●授業前に研修会を持ち、見て欲しい箇所と指導案の検討会が短時間でもあればよい。授業者の意図が分かる。</li> <li>●学年部の職員が、年次・出張などで全員そろわないことが多く、人数が少ないために深まらないことが多かった。</li> </ul>
その他	<p style="text-align: right;">抽出生徒の観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・継続（する）。</li> <li>・4月から特定の生徒を抽出して年間を通して観察することで、成長の姿が見て取れるのではないか。</li> <li>・学年の教科担任が共通してその生徒とのかかわり方を探る機会にもなると思う。</li> </ul>

表7 「天中方式・付箋研修」に関する成果と課題

成 果	付箋研修の意見の出しやすさ・視覚的
	生徒の学びの姿
	研修方法のよさ
課 題	付箋研修の進め方の確認
	司会の技量？互いに学び合い、指摘できる同僚性
	自分の授業に生きる研修の在り方
そ の 他	ルールの確認は何度でも・・・ライブ+ビデオ・天中方式の継続

○付箋があるために、否応なく意見を言わざるを得ないので、若い先生や講師の先生にはよいと思う。  
 ○付箋で全員が意見を出し合え、成果や課題が視覚的にも見えてくる。  
 ○お互いに意見交換しやすい雰囲気がよい。  
 ○生の意見が交換できる場合は貴重。  
 ○全員の発言を聞くことができる。少人数で発言がしやすい。  
 ○意見が出やすく、また成果や課題が整理されて分かりやすい。  
 ○模造紙に張ることにより、先生方の意見を全体的にまとめて見ることができた。  
 ○発言がよく理解できた。  
 ○付箋を使った研修は全員の意見を引き出すことができ、とても有効な手段だと思う。  
 ○付箋方式（小グループ）は、様々な意見や感想を出しやすい雰囲気になり、よいと思う。  
 ○意見が活発に出し合える。  
 ○共通理解をしやすい。

○生徒の名前が出ることで、より具体的な協議になっている。また、焦点生徒を設定することで、成果や課題がより浮かび上がりやすくなっている。  
 ○生徒の様子や変容をもとに、生徒にとって効果的な学びの在り方を話し合うことが当たり前になってきた。

○付箋研修では様々な先生方が教科の枠を超えて話し合うよい機会であった。いろいろな視点・角度から生徒を観察していることが勉強になった。  
 ○付箋に書くことにより、授業中にも時間を取ることなく内容を書き留めることができた。  
 ○すべてが定着し、混乱せずに研修会が進められるようになった。  
 ○今までにない方式の研修は私にとっては新鮮。  
 ○職員全員で学校の研究の体制について同時に同じ手法で学べているのが最大の成果。  
 ○学ばせ方を客観的に見つめることができるので、たいへんやりやすい。

●前期の初めは進め方がよく分からずとまどった。  
 ●授業を見る観点の確認を、研究会前にその都度した方がよい（生徒の様子や教師のかかわり方を見るなど）。  
 ●職員会議以外でも、年度当初の研究会でのルールをあらためて確認するとよい。  
 ●1枚の模造紙の中のカードをキーワードでくくる。途中で口をはさまず付箋の言葉で話を進めるなど、慣れていない人がある。数をこなして話し合いの密度を高めていきたい。  
 ●話題が散漫になりやすい。  
 ●付箋のサイズ、記入の仕方（1枚に一つの内容）、文字の大きさ、キーワードでくくるなど、ルールの再確認をする必要がある。今年スタートした時点でばらばら（いろいろな人がいた）だったように感じた。  
 ●教科の指導方法に入らない（深入りしない）ように気を付けたい。  
 ●「成果」なのか「課題」なのかどちらか分からない付箋もあった。

●司会者、参加者の違いにより、協議の内容が一定でなくなる。  
 ●司会者の技量によって、話し合いの深まりがまったく変わってくるので、コーディネーターとしての司会者のシナリオを丁寧にシェアリングすべきである。

●よりよい指導の在り方は？自分の授業に置き換えたとしたら？という研修にはなかなか結び付いていかない気がする。指導主事の先生から言われたが、研修でない「明日の授業」のために何かが残りましたか？になかなか行き着かない。  
 ●自分の授業にどう活かすかの話し合いが不十分であった。

・付箋研修会のルールを再確認できてよかった。  
 ・4人グループはすべての時間に固執せず、柔軟に。  
 ・授業をVTRに収め、気になる部分を数分だけで全員で見ると、まだまだ工夫できる余地があると思う。  
 ・厳密に学びの教育の研究を進めるよりも、これまでどおりの天中方式の良いところ取りで進めていってほしい。  
 ・生徒を見るという視点のため、参加できる範囲で参加していきたい。

表8 学びの研究会（年2回の外部講師を迎えての授業研究）の成果と課題

成 果	外部講師の活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>○指導の先生のお話は学ぶべきことが多かった。時間をもっと取って、十分なお話をお聞きしたい。</li> <li>○講師を招きながらも、天中独自の研究方法や立ち位置をもっている。</li> <li>○講師を招くことで新しい視点で物事を考えられるようになる。</li> </ul>
	研究の方向性の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全員で本校の研究の共通理解ができ、成果や課題が確認できる。</li> <li>○全員が一つの目標に向かって取り組むようになった。授業づくりの目指すべき方向が分かりやすくなった。</li> <li>○全教師の共通理解ができた。</li> <li>○毎年、学び合いの理念について確認でき、初心に返ることができるところがよいと思う。日々の授業の中で忘れてしまったことを確認した。</li> <li>○年度初めと中間での「学び合い」に対する取り組み方の相違を改めて知るきっかけとなった。</li> <li>○4人グループなど、天中方式がしっかり決まっているので、プレずに研修できると思う。</li> <li>○天中全体が引き締まる研究会であった。ただ、12/1の研究会はあまりにも参加者が多く、公開研究会のようだった。生徒も小林先生もすばらしかった。</li> </ul>
	教師の学び合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全員で一つの授業を見るということでも意義があった。しかもその後、4グループに分かれて付箋研修をしたことも多様な意見が聞けてよかった。</li> <li>○グループ研修をすることで、すべての先生方の考え方に触れることができる。</li> </ul>
	生徒の学びの事実から授業を語る	<ul style="list-style-type: none"> <li>○個々の生徒やグループの学び合いを大勢で見ることによって、それぞれの生徒たちについての話し合いが深まった。</li> <li>○特定の生徒に着目して授業を見る（生徒の名前を書く）ことについて、壁・窓際で参観し、生徒の視線をさえぎらない、学びに入り込まないなどの制約から、いつも決まった場所にいる生徒を見ていたが（自分の力のなさから全体を見られずに…）、12/1の研究会では注目してほしいグループや個人が示されていて、大変見やすかった。</li> <li>○普段教えている2年3組の子どもたちの表情が生き生きとして輝いていて、いい意味でショックを受けた。子どもたちが意欲をもって学ぶとはどういうことなのかを彼らから学ぶことができた。</li> <li>○2年3組の輝いた顔を見ることができた。また、生徒に目を向けるために、観察対象を絞ったことで、研修会ではいろいろな班内での生徒の思考過程を知ることができた。</li> <li>○生徒の授業の取組について語る機会となり、自分自身の授業についても考えることができた。</li> <li>○学びのスタイルについては、生徒たちも身に付き、進歩してきていると思う。</li> </ul>
課 題	小グループによる付箋研修の在り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>●付箋グループは、できるだけ学年部のメンバーと異なるグループ分けにした方が新鮮な話し合いができる。</li> <li>●グループ研修だと、先生方が意見を出されたときの雰囲気伝わらない。</li> <li>●黒板にグループ研修の模造紙をすべて並べておけるなら、それぞれのグループの視点の共通項や相違点等も比較できるので、さらに深まるだろうと思う。</li> </ul>
	4人グループとコの字型の座席	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4人学びをねらい達成のために、いかに効果的に配置していくかが今後の課題。</li> <li>●学び合いの使える場面と、そうでない場面の使い分けについて考えていく必要がある。</li> <li>●全員前向きとコの字型の座席の使い分け方のルールがあればよい。いつでもコの字型は変でないか。</li> </ul>
	●授業参観のルール「生徒に話しかけない」が守られていないことが多く、徹底した方がよい（教師にも、生徒にも甘えがある）。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教科や授業者をどういう視点で決定するか。</li> <li>●当日の授業では小さい教室にたくさんの教師が入り過ぎていたように感じた。他により方法があればよいが…。</li> <li>●自分の授業を自習にすることは非常にづらい。</li> </ul>
そ の 他	長期休業中の研修（学びにかかわって？）外部講師による研修の必要性？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期休業中に別の形式の研修会で学ぶことはできないか？生徒が校内にいる日に研修だと何かと気ぜわしい。</li> <li>・来年度終了後、継続の有無を再検討。</li> <li>・授業をなさった先生方、本当にすばらしい授業を提示くださってありがとうございました。</li> <li>・出張と重なり、参加することができなかったが、来年は参加して学びたいと思う。</li> </ul>



各グループから付箋紙を用いた協議の結果を全体に報告し、通常の研修会の内容をほぼ終了した後に、外部講師から、提示された授業における「生徒のグループによる学び合い」について、コメントと指導、さらには講話をいただくという形式で行っている。

この点では、ワークショップによる「為すことによる教師集団の学び」と「トップダウン的な知識の習得」とがマッチした研修となり得ている。

#### 5-4. 校内研修会の今後の課題

第一は、授業参観・授業検討会の視点や方法に関する申し合わせ事項の確認方法であろう。特に、異動されてきた先生方への主旨の理解、あるいは改善への全体の合意の方法等の検討が必要である。

第二は、生徒の学びの姿（事実）を基にした授業検討の更なる深化である。とりわけ、通常、授業者の目が届かない生徒の姿を知るだけではなく、その生徒への対応等の協議も、別途必要になろう。

そして第三は、この付箋紙を用いたワークショップ型の検討は、当該授業を通して、参観者自身の授業改善への示唆・ヒントを得るという視点である。この視点が欠けると、単なる繰り返しの研修会となってしまう。表7には、その課題として2つの指摘がある。同校では、これを毎月、前月の目標を反省して翌月の課題とするような試みをしている。

#### 6. 校内研修会の成果

同校の全国学力状況調査の結果の推移を見ると、以下のようなことが言える。2007年度は国語は概ね国の平均をわずかに上回り、数学は国平均を下回っていた。その後、上昇傾向が続き、2010年には、国語と数学ともに国の平均より10ポイント程上回るようになった。とりわけ、両教科とも、B問題では、15ポイント程度上回っている。表2のように、生徒の思考を深める指導が、校内研修会における授業力向上により、その効果が現われていると推測できる。同様に、生徒質問紙による生活状況を見ると、表9のように家庭学習や生活態度にも大きな改善が見られることがわかる。一部に、「学校の規則を守っている」のようにやや低下したものがあるが、これも従来は良しとしていたことが不十分であると認識できるようになってきたと解釈できるものである。

これらの結果は、

・「コの字型座席」や4人グループによるコミュ

表9 生徒質問紙に見られる生活態度の変化の推移

項目	19年度	22年度	県平均
家族と一緒に夕食	45	65	65
家族に学校の出来事を話す	55	73	67
6時半前に起床	16	35	42
午前0時以降に就寝	26	16	21
ケータイを持っている	71	37	39
テレビ等を2時間以上	70	61	58
平日1時間以上の家庭学習	58	82	71
塾や家庭教師	50	43	34
失敗を恐れず挑戦	56	75	68
自分にはよいところがある	49	74	68
学校の規則を守っている	50	47	48

ニケーションのある協同的な学び

- ・学習意欲や課題意識を高め、全員の学びを保障する学習課題の設定、グループ活動を取り入れた互恵的な学び－生徒相互の意見交換を促し、活用する力の育成
- ・課題提示から学習のまとめを意識した導入の工夫（提示まで7分）やグループ活動への指示（手立て）の明確化、課題と連動したまとめの工夫などを意識した授業実践を推進
- ・まとめの重視－基礎的・基本的な知識・技能の定着や自分の考えを書く力の育成

等の学習をテーマに進めてきた授業力向上を目指した教職員の取組と共に、生徒自身の学習に立ち向かう意欲と態度が向上してきた結果と言えよう。また、確かな学力を身につけさせたいという保護者の願いと支持・協力にも負うことが大きいと考えられる。

以上のように、個々の因果関係は明確ではないが、総体としての校長のリーダーシップのもとに、実践してきた授業改善、とりわけ、授業力向上を目指したワークショップ型校内研修が、生徒の学力の向上と生活状況の改善も図り得ると言えよう。

#### 7. おわりに

全職員が共通理解のもとに、協同して授業実践を語り合うワークショップ型校内研修は、教員が自信を持って日常の授業実践に取り組む原動力になっている。このような授業改善が、教師が自信を持って授業を行うことにつながり、生徒の向上と家庭学習や生活態度の改善にもつながっていく。

これまでのトップダウン的な知識伝達をねらいと

した教科中心の校内研修と、ワークショップ型の研修を通して、教師としての力量形成のための徒弟的な伝承やあるいは暗黙知を実践的知識としての形式知化していく場としての校内研修の両者をミックスするような「学びの研究会」的な研修会の可能性やその質が問われることになろう。

**謝辞：**校内授業研修会のアンケート調査について全面的にご協力いただいた潟上市立天王中学校の齊藤正博校長、後藤秀司研究主任をはじめとする教職員の方々に、記して感謝の意を表します。

**附記：**本研究の一部は、科学研究費補助金・基盤研究（C）（研究代表：浦野弘、課題番号：22500907）及び科学研究費補助金・基盤研究（B）（研究代表：南部昌敏、課題番号：22300283）の支援を受けている。

### 参考文献

- 秋田喜代美（2006）「授業研究と談話分析」，放送大学教育振興会
- 秋田喜代美（2008）「授業の研究 教師の学習」，明石書店
- 市川伸一（2008）「教えて考えさせる授業を創る 基礎基本の定着・深化・活用を促す「習得型」授業設計」，図書文化
- 市川伸一・鎗木良夫（2009）「新版 教えて働かせる授業 小学校」，図書文化
- 浦野弘・佐藤修司（2008）「新任研究主任が抱く教職員の力量向上と校内研修会に関する意識調査」，秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第30号 115～163頁
- 浦野弘（2009）「公立中学校における校内授業研修会の持ち方に関する意識の調査」，秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第31号，143～150頁
- Gagne, R.M., Wager, W.W., Goras, K.C., & Keller, J.M. (2005) Principles of Instructional Design (Fifth Edition), 鈴木克明・岩崎信監訳（2007）インストラクショナルデザインの原理，北大路書房
- Keller, J.M. (2009) Motivational Design for Learning and Performance; The ARCS Model Approach, Springer SMB, 鈴木克明監訳（2010）学習意欲をデザインする ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン，北大路書房
- 澤本和子・宗我部義則編（2005）「夢中・熱中・

集中…そして感動 柏市立中原小学校の挑戦！  
－授業リフレクションでの校内研を変える－」，東洋館出版

澤本和子（2009）「実践知形成のための教員養成カリキュラム「授業研究論」の開発～熟考と省察を通じて形成する実践知モデルを基盤として～」，日本教育工学会第25回講演論文集

佐藤雅彰・佐藤学（2003）「公立学校の挑戦－授業を変える学校が変わる」，ぎょうせい

佐藤学（2006）「学校の挑戦－学びの共同体を創る」，小学館

中央教育審議会（2005）「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」，文部科学省

村川雅弘編（2004）「ワークショップ型研修のすすめ」，日本文教出版

村川雅弘編（2006）「ワークショップ研修の手引き」，ぎょうせい

村川雅弘編（2010）「『ワークショップ型校内研修』で学校が変わる 学校を変える」，教育開発研究所 横浜市教育センター（2009）「授業力向上の鍵ワークショップ方式で授業研究を活性化！」，時事通信社 吉崎静夫（2008）「事例から学ぶ 活用型学力が育つ授業デザイン」，ぎょうせい

### Summary

This research was researched at Tennou Junior High School, Katagami-City, Akita-Prefecture.

The principal of this school adopted in-service teacher training in the school using the workshop type method by the collaboration between teachers. And he had promoted the improvement of the in-service teacher training aiming at student's improvement of scholastic attainments.

It reports on the result of training for teacher's competency of lesson management and student's improvement of scholastic attainments based on the practice in fiscal year 2010.

It is reported that it functioned as the following are effective.

The first is in-service training in school's aim: It improves to the target intended for the instruction of teacher's competency of lesson management.

The second is in-service training in school's system: System of in-service teacher training

in school including the teachers' meeting etc. to obtain the common understanding between teachers.

It is clarified that the in-service training in school of the workshop type that the tag paper used is effective from the result of the questionnaire survey. And the learning of the teacher who had used the in-service teacher training in school rises when there was an invitation lecturer was suggested

**Key Words** : Professional skills, Development of teacher qualities, Teacher education, In-service teacher training, Improvement of scholastic attainments

(Received February 15, 2011)

#### 資料 天中方式・付箋研修の方法

##### 1. 授業参観・授業分析の視点

- (1) 「授業を見る視点」を授業のデザインに明示する。これに沿って、個々の生徒やグループに対する授業者のかかわりと、生徒の学び合いでの動きを中心に観る。付箋には座席表をもとに、生徒の個人名が入るようにする。
- (2) 授業者が生徒を観る視線をさえぎらないように、教室の壁際で参観する。また、生徒の学び合いには介入しない(生徒に話しかけない)。
- (3) 学び合い(視点1)については、次のような観点から参観する。成果を黄色付箋、課題及び改善点をピンク付箋に記入する。
  - ① 生徒を見る目
    - 表情やしぐさ、つぶやき「生徒がどこでどう学んでいたか、つまづいていたか」
    - 生徒どうしのかかわり「学び合いを充実させるための生徒どうしのかかわりはどうであったか」
  - ② 教師を見る目
    - 生徒の学び合いに対するかかわり
    - 授業のデザイン「学び合いを充実させるための授業の構成はどうであったか」
- (4) 成果に関する考え方
  - ① 生徒の学びの事実から、授業者のかかわりの成果(課題)について語る。
  - ② 授業参観から得た自分の授業への示唆について語ることも、自分の実践を振り返り、学び合うことにつながる。
- (5) 課題及び改善点に関する考え方
 

ライブで授業を観ると、「自分であればこうする」と考えさせられることが多くある。改善策(代案)を示すことは授業者の意図を否定することではなく、自分の授業改善に向けて学んだことを互いに共有することになる。

##### 2. 授業分析の方法

- (1) 授業分析は小グループによる付箋研修で実施する。模造紙パターンをマトリクス法とする。
- (2) 「授業を見る視点」に沿って、授業者から授業を振り返ってもらう(全体)。
- (3) グループ別で付箋研修を行う。付箋は初めからすべてをはるのではなく、はりながら内容を補足するように発言する。また、関連したものをはりながら進める。

模造紙パターン(マトリクス法)

	視点1「学び合い」	視点2「学習課題」または「まとめ」	その他
成果			
課題			
改善策			